

驚異に満ちたキルヒャーの伝説的代表作 本邦初紹介！

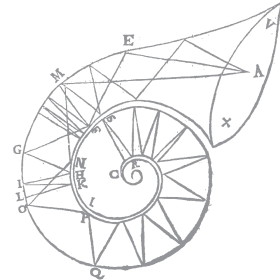


『普遍音楽』は、一七世紀に記された最も重要な論考のひとつであり、バッハやヘンデルら後代の作曲家たちに多大な影響を与えた。しかし、好奇心のかたまりであり、奇事異聞のこよなき愛好者であるキルヒャーの想像力は、音楽史の枠にとどまることがない。彼は彼の時代までに行われていたほとんどの作品形式について、ていねいに論を進める一方、ひとたび古代音楽を相上にあげると、その空想力と妄想力は全開となる。ナマケモノの歌、歌う魚、猫オルガン、拡声器、盗聴装置、会話する彫像、イオリア竖琴、自動作曲機械などの不可思議な事物が次々に登場。さらに実験的音響論は、「音は光をまねる猿である」という主題のもとに語られ、宇宙の神秘と真理はパイプオルガンの音と構造の中に見出される。驚異に満ちたアタナシウス・キルヒャーの伝説的代表作、本邦初登場。

アタナシウス・キルヒャー

普遍音楽

調和と不調和の大きななる術



菊池賞Ⅱ訳

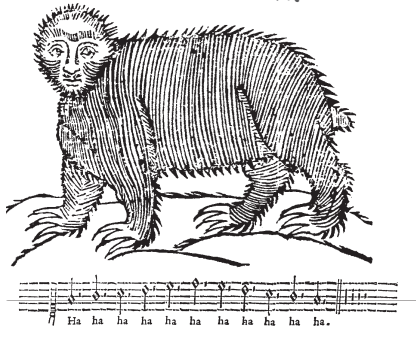
Athanasius Kircher

Musurgia universalis sive ars magna consoni et dissoni

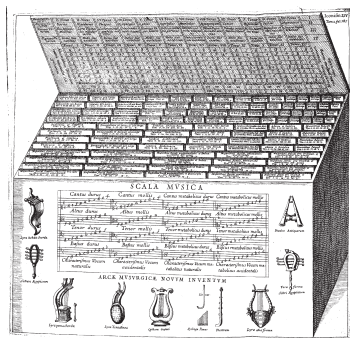
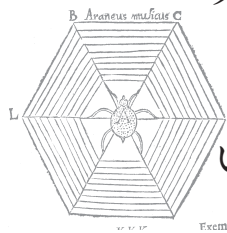


Athanasius Kircher, 1601 — 1680

ドイツ出身の学者、イエズス会司祭。その好奇心の対象は多岐にわたり、古代エジプトとその言語と象形文字、光学や磁気学をめぐる自然学、音楽、天上界と地上界、地質学、光と影、医学、暗号論、中国学など幅広い分野の著作を残した。ヒエログリフ解読の先駆者、あるいは伝染病微生物原因論を初めて実証的に示し予防法を提案したことで知られる。その著作群は、一時はデカルトの合理主義の立場から批判にさらされたが、20世紀後半には、その業績の先進性と多彩さが再評価されるようになり、「遅れてきたルネサンス人」とも呼ばれるようになった。



▲ナマケモノとその歌の譜面



▲自動作曲機「音算箱」

キルヒャーは、インターネット以前のインターネット的存在である。知りうることをすべてを知り尽くし、その知識の五〇％は正確で、残りの五〇％は誤謬と妄想だった。——J・C・カリエール
キルヒャーは、一七世紀最高の博識家である。——ステイヴン・ジェイ・グールド
私の蔵書で、一番の自慢はキルヒャーのほぼ完全なコレクションである。——ウンベルト・エーコ

2013年8月刊行／予価＝4800円 [A5判変型／448ページ]